

地域の底力——尾道市

高台から見下ろした尾道の町は瀬戸内の陽光に輝く。広がるのは「しまなみ海道」の島々。

取材・文 千葉望 写真 栗原克己

古い伝統を感じさせる町並みとしまなみ海道が、たびたび映画のロケ地に使われたことで知られる尾道市。この魅力的な町も高齢化の波に洗われ、悩みは尽きない。そこにさまざまな形で立ち上がった市民がいる。空き家の再生、閉館した映画館の復活、IT技術を生かした観光資源の活用。彼らの心意気と活動を追った。

市民の力で 「再生」が進む町 「尾道」を訪ねて

広島県尾道市

観光地・尾道が 抱える根本的な悩み

瀬戸内海にせり出すように山が迫る広島県尾道市。町を見下ろす千光寺公園まで一気にロープウェイで登っていくと、陽光に輝くしまなみ海道の島々が目の前に広がった。斜面地には古い家や寺院が軒を連ね、尾道独特の景色をつくり上げている。

なるほど、これなら映像作家たちを刺激するのも当然である。「東京物語」の小津安二郎、「転校生」「時をかける少女」「さびしんぼう」の尾道三部作の大林宣彦。彼らの映像には尾道の町が登場人物以上の存在感をもって映し出されている。今、尾道は「映画の町」として有名になり、作品に登場した場面をたどるファンの姿をよく見かける。

だが、よそからやってくる人間には見えない悩みを抱えているという点では、尾道もまた典型的な地方都市である。若者の人口が減り、高齢化が進む。観光客には風情のある坂道も、高齢者にとって

は「バリア」そのものである。それを具体的に示すように、坂の両側に建ち並ぶ家々の中には人の気配がしないものもある。

増えた空き家に 新しい命を与える

NPO法人「尾道空き家再生プロジェクト」代表理事を務める豊田雅子さんが、こんなことを教えてくれた。「斜面地の方では、空き家の中に仏壇を置いたままの家とか、布団を敷いたまま無人になった家が普通にありますよ」

豊田さんは、尾道のあちこちに ある空き家をリノベーション（再生）し、そこを地域の人たちが集まる場にしたり、若者に貸し出す活動を行っている。取材をさせてもらったのはそんなリノベーションの成果を示す「北村洋品店」とんがり屋根がかわいらしい木造の建物である。中に入るとそこには懐かしい昭和のにおいと現代とがほどよく溶け合った空間が広がっていた。

座敷の真ん中にはなんと井戸。リノベーションの最中に床をはが

して見つけた古い井戸の上に、アクリルの透明な板を渡してテーブルに使っているのだ。今、この建物はNPOの仲間たちなどが集まって文字通りの「井戸端会議」をわいわい楽しむ場所となっている。

「ここは私が買い取った家ですけど、リノベーションはみんなで作りました。家造りの楽しさや難しさ、いろいろな仕上げのやり方を学べて、みんなで関わっている場所が欲しかったんです。またここは子育てママのサロンにし



右／「北村洋品店」二階部分。若手のアーティストたちによって完成させた。左上／一階床のタイルの原画は幼稚園児が描いたもの。左下／とんがり屋根の木造建築がモダンでかわいい。

NPO法人「尾道空き家再生プロジェクト」代表理事の豊田雅子さん。双子の男の子のママだ。



ように思い、子育て支援の助成金を二つ三つ頂きました。

リノベーションには子どもからお父さんお母さんまで参加してもらいました。尾道建築塾という職人さんを講師に招いて現場で壁塗り体験するという試みも行って、仕上げていきました」

ちなみに、講師の一人は大工である豊田さんのご主人である。

二階が上がってみると、そこは雑貨屋さん。手縫いの帽子やバッグなどが小さく区分けした棚に置かれている。

「この棚は一カ月五〇〇円で貸し出しているんです。手仕事の好きな子育てママが借りて、自分の商品を並べています」

二階の天井や手すり、柱の仕上げには、尾道の斜面地に移住してきた若いアーティストや尾道大学でデザインや美術を学ぶ学生が参加した。全体をプロデュースしたのはもちろん豊田さんである。北村洋品店が持つ、かわいらしさとアート性が微妙に混じった味は、建築物好きの豊田さんがコントロールして生まれたものだ。

豊田さんは北村洋品店のすぐそばの古いアパートをリノベーションして、若いアーティストに貸し出す活動も行っている。そこではトイレは共同、風呂は無し。おまけに一部屋はアトリエとして外部の人に公開してもらうという条件付きだが、家賃は一万八千円か二万円という安さ。ほとんどが埋まっている。

「彼らは都会では生活費を稼ぐだけで大変で、思うように暮らせません。でも尾道なら安い家賃で古い家が借りられ、中には自由に内装を変えてもいいという大家さんもういらつしやる。人が住んでくれれば家が傷まないからそれだけで十分なんです。固定資産税を払ってもらえばいいとか。ですか

らどんどん若い人たちが移住してきますね」

リノベーション作業では仲間たちが集い、掃除から廃棄物の処理に始まり、実際の工事までできるだけ自分たちで行うことにしている。斜面地にある建物の場合、車が入れないのでほとんどが人力での作業となる。きつい作業も仲間が集まれば楽しくなるという。

技術の伝承も可能な名建築の再生

もう一軒、豊田さんが買い取ってリノベーション中の建物がある。

る。通称「ガウディハウス」。きつい斜面地に建つ地下室（かつての防空壕）付き二階建て。だがここはほかのリノベーション物件と違い、プロに修復を任せている。昭和八年に豪商が別邸として建てた、職人技の粋を集めた建築物だからである。

「二人の大工さんが三年をかけてこつこつ造ったものだそうです。とても凝った建物で、素人には手が出せません。プロの職人が手がけても、いろいろ勉強ができる家なんです」

傾斜を生かした設計で、敷地は狭いものの、あちこちに優雅な細

これが通称「ガウディハウス」。急勾配の坂を生かし、大工の技術の粋を集めて建てられている。





左上／磨りガラスや電灯カバーのデザインもモダン。
左下／まだ修復中の邸内。
右／優雅なカーブを描く階段左の引き戸に注目。

工が施されている。

「夫も、新しい家を一〇軒建てるより古い家を二軒修復した方が勉強になると言っています」

大学卒業後大手旅行代理店の添乗員として働いていた豊田さんは、古い建築物を生かしながら美しい町並みを保つヨーロッパの国々に心惹かれた。特に南仏や南イタリアが好きだという。海に開かれた小さな坂のある町。尾道にそっくりだ。日本は伝統を誇る国

であるはずなのに、古い財産を現代に生かすことが下手だと感じた。

「人が生きていくのにちょうど良いサイズ。それが尾道にはあると思います」

尾道の良さを受け継ぐために始めたNPOの活動は、内外のアーティストを呼び寄せながら静かに続けられている。

「映画の町」から一時失われた映画館

もう一人、失われようとしたものを蘇らせた女性がいる。NPO法人「シネマ尾道」の代表兼支配人、河本清順さんである。河本さんが子どものころ、尾道にはまだいくつかの映画館があった。映画好きの祖父に連れられて河本さんもここで「ドラえもん」に始まる子ども映画を楽しんだ。今「シネマ尾道」になっている映画館「尾道松竹」にも通った記憶がある。だが、二〇〇一年「尾道松竹」が閉館し、尾道の映画館はすべて姿を消した。

「これも閉館直前は、昼間はハ

上／内装をきれいにして蘇った。椅子は閉館する映画館から譲られたもの。下右／入口には寄付者の名前が掲げられている。下中／「北村洋品店」から椅子のプレゼントが。下左／館内や窓口にも手作りグッズがいっぱい。



リウッド映画、夜は成人映画、夏休みには子ども映画という具合で、いろいろなものが混在する映画館でした」

その時々で、観客が少しでも入りそうなラインナップ。映画館も苦闘していたのだろうが、個性があるとは言い難い。当時は全国的にシネマコンプレックス（注）が増え、音響が良く座席などの設備も新しい映画館が続々と誕生していた。地方の小さな映画館が太刀打ちできる状況ではない。閉館す

るのは自然の成り行きだった。

「私はどこの町にも映画館は必ず必要な場所だと思っているんです。いくらDVDがあるとはいえ、暗闇の中で大勢の人と一つの作品をスクリーンで観て、感動を共有する体験は味わえない。私はたまたま尾道に生まれて、大好きな町だから映画館が欲しかっただけ。映画の町に映画館を復興するとうような大きな気持ちではなかったですね」

自然な気持ちから河本さんは映



画館の復活を思い立った。町の人々から寄付を募り、映画館内部を改装してもう一度映画を上映したい。そんな思いからNPO法人を設立したのである。

市民の支援を得て 志ある映画館が誕生

河本さんは写真で見る以上に小柄な若い女性である。話し方も静かだ。こういう女性が再興運動を思い立ち、一生懸命に映画館の必要性を説いて回ったとき、尾道の人たちは思わず手を差し伸べたのだろう。

「事業企画書や予算書も、予想利益はマイナスのままで出しました。いろんな方が協力してくださ

って工夫したものの、どうやってもプラスにはならないんです（笑）。最初のうちは、周りもいつまで続くかという感じで見ていたと思います」

だが、河本さんは諦めなかった。四年間続けるうちに、周りの目も変わってきたという。「シネマ尾道」の入り口には寄付金を寄せてくれた法人・個人の名前が掲げられている。

「匿名希望の方も多いので、あそこに掲げている方は一部なんです。本当にたくさんの方たちが協力してくださいました」

閉館したよその映画館から映写機や座席などを譲ってもらい、できるだけ安くあげるように努力した。だが、映写機を預けていた倉



NPO法人「シネマ尾道」代表理事の河本清順さん。横に立つ看板は尾道大学の学生が作ってくれた。取材当日はレディースデー。

庫が火災になり、焼失するという苦難もあった。

「大変なショックだったんですけれど、次の日から違う映画館に泣きながら電話をして映写機を探しました。そうしたら今は一カ月にいくつかは映画館が閉館している時代なので、思いのほか早く見つかったんです。同情してくださったのか、寄付金もさらに集まりました」

お金は節約しながら使ったが、それでも今の観客が求めているもの——例えばきれいなトイレ設備——にはこだわった。特に女性客に来てもらうためには、清潔なトイレは絶対条件である。このほか、スタッフのアイデアを生かした看板などのPOP、ちらしなどの掲示が楽しく、若いセンスの感じられる新しい映画館になっている。

「ケーキやコーヒーを入り口で販売していますが、このケーキも尾道の洋菓子店で作っていただいています。ふだん作っていないポップコーンを作ってくれたさつたり、『ローマの休日』を上映した



ときはオリジナルケーキを作ってくれたことも」

その店主は河本さんの活動に共鳴して協力してくれるのだという。『シェルブルーの雨傘』を上映した時は町のフランス料理店の地図を作り、相互割引をしたり、店側が「シェルブルーの雨傘特別コース」をメニューに組み込んでくれた。できる範囲で、楽しみながらバックアップをしてくれるこ





右／町を歩いていると携帯電話で読み取るQRコードや番号の付いたプレートを見かける。これを使ってその場所の情報や掲げられている絵の解説を入手できる。下／尾道は猫の多い町だ。のんびりした坂道で猫に会うのも観光客の思いがけない楽しみ。



とが河本さんにはうれしい。河本さんの活動に賛同する映画人(例えば映画監督の西川美和氏、俳優の奥田瑛二氏)も映画館を訪問し、トークショーなどで盛り上げてくれた。

今、「シネマ尾道」では大スクリーンが似つかわしい大作映画ではなく、良質の佳作を選んで上映している。また独自企画として古い日本映画や、無声映画の上映にも取り組む。小さくても志の感じられる映画館。こんな映画館がすぐ近くにあったらどんなに良いかと思わせた。

先端のIT技術で 観光地・尾道を活性化

尾道は城下町ではなく、商人たちが造った土地である。財力のある商人たちには旦那気質が受け継がれ、進取の気風にも富んでいる。こう語るのは、「プラットフォーム・おのみち」の代表理事・徳永さんである。徳永さんたちは、観光地として知名度の高い尾道にもっとIT技術を取り入れ尾道を深く理解してもらおうと、京都造形芸術大学の竹村真一教授の協力を得て、携帯電話を使う「尾道どこでも博物館」を運営し始めた。今から八年前のことである。

尾道の町を歩くと小さな石のフクロウが置かれているのを見ることがある。そこには小さなプレートが付いていて、番号が書かれている。番号を携帯に入力すると、



その場所の解説を聴けるという仕組みだ。

「当時は携帯電話で観光情報を提供するツールは非常に珍しくて、取材もたくさんありました。最近は当たり前になったのか、数は減りましたが、私たちはいわば先駆者だったということですね。今では、携帯電話が進歩してほとんど持ち歩くコンピュータと



石でできたフクロウを見かけたら、その番号を携帯電話で入力して情報を手に入れよう。

化しています。新しい方向性でいろいろな展開が可能だと思っています」

尾道の夏の風物詩である住吉花火祭りでは、花火のプログラムを携帯で見られるという実験も行った。今何番のプログラムをやっているのか、確認できるという実験で、全国的に珍しい時期に行った。このほか学校校舎の屋上に自然エネルギー発電装置をつけ、携帯を使って防災カメラのスイッチをオンオフするという実験など、さまざまな試みに挑戦している。これも、尾道人が受け継いできた進取の気性がなせる業だろう。

新しい試みとしては、しまなみ海道に面した海岸通りの護岸壁で展示されている「海辺の美術館」がある。徳永さんとお仲間の濱



観光客には楽しい坂道も、高齢者にとってはバリアそのもの。人が住まなくなった家も増えている。独特の地形を生かす町おこしが急務だ。左／対岸への足はフェリーが中心。



「海辺の美術館」そばで、NPO法人「プラットフォーム・おのみち」代表理事の徳永修さん（中央）、濱本義樹さん、武田智子さん。

本義樹さん、武田智子さんにも同行してもらい、美術館に向かった。「海辺の美術館」には、二〇年以前から行われているコンテスト「絵のまち尾道四季展」の入賞作を一三枚ステンレス板に原寸で焼きつけたものをコンクリートの護岸壁に展示してあった。

絵の近くに掲示されているQRコードを携帯電話で読み取ると、絵の解説が流れてくる。解説朗読をしているのは武田さんだ。不要な解説をがんが流されるのは嫌

なものだが、これなら聴きたい人が自分で選んでアクセスできる。古い町が持つ価値を最先端のIT技術がアピールする。日本の観光地がさまざまな形で海外の人にも訴求できる手法だろう。

日本は「観光立国」というテーマを掲げ、外国人観光客の誘致に力を入れている。活用されていない観光資源も残っており、科学技術大国である日本がやるべきことはまだまだあるはずだ。

実は濱本さんと武田さんは自転車愛好家。暇さえあれば、サイクリング用自転車を何十キロも走らせることに夢中だという。そんな二人は、自転車で行くしまなみ海道の素晴らしさを語ってやまない。たしかに橋とフェリーでたくさん島の島が結ばれ、起伏のある変化に富んだ景色のしまなみ海道で、平谷尾道市長の夢でもある、しまなみ海道高速道路を時間帯で借り切つてF1のような自転車ロードレースを開催できれば、世界の愛好家に喜ばれるに違いない。「サイクリストが自転車をこぎながら、携帯で周辺地域や自転車コースの情報を入手できたら素晴

らしい」

と口をそろえる。

航空写真で見ると尾道はイタリアのアマルフィに引けを取らない景色。しかし海岸沿いの町並みはヨーロッパの美しさには遠く及ばない。もっと魅力的な町にすることができると。

豊田さんが手がける空き家のリノベーション、あるいは河本さんの「シネマ尾道」ができたこともきっかけとなって少しずつ活性化している商店街と、尾道が魅力を増す活動は少しずつ広がりをみせている。



「NPO法人同士の横のつながりも結構あるんです」

と語る徳永さん。つながりが具体的な活動に結びついていけば、尾道は本来の魅力にもっと輝きを増し、世界の人を呼び寄せる町になっていくことだろう。

（注）同一施設に複数のスクリーンを持つ映画館。

